心肺蘇生法に神様は必要か？

　嫌な夢を見たのは、いつ以来だろうか？

　不思議な力で心臓を止められて死ぬ、何ともロクでもない夢である。それだけならまだいい――いや、決して良くないが――のだが、その後何故か生き返って、再び心臓を止められた。それがエンドレス。目が覚めた今でも分かる、あの息苦しい感覚。

　実に不快だった。

「くぅぉおらぁっ、神野！　お前、俺の授業中に何寝てんだっ？」

　五月蝿い黙れジジイ。俺は今機嫌が悪い。

「さっさと起きろ！　起きなければ、ハリセンでぶっ叩くぞ！」

　やれるもんならやってみろや。体罰って事であんたの教師生命を終わらせてくれるわ！

　……なんて事が言えれば、この気分も吹っ飛ぶのだろうか？

　渋々、俺、は机に突っ伏していた顔を上げる。せめてもの反抗に、軽く伸びをした。それが不愉快だったのだろう。現国の教師は青筋を立てて俺の事を睨んでいる。

「……で、何で寝ていたんだ？」

「何で……って、そりゃあ、眠いからに決まっているでしょう。何当たり前の事聞いてるんすか？」

　さっきのは無理でも、これくらいの暴言ならしょっちゅう吐いているから全然平気だ。

　おっ、青筋の数が増えた。

「お前……今回の通知表の評価も覚えてろよ……授業態度が悪いってことで、思いっきり下げてやるから」

　先生の声にも、はっきりと怒りの色が滲んでいる。ふっ、もう少しからかってみるか。

「あー……小テストと定期テストで毎回満点取れますし、提出物もしっかり出してるんで、授業態度で点数下げられても痛くも痒くもねーっす」

　そう言って俺は、先生にサムズアップをしてみせる。明らかに青筋の数がさらに増えたのが分かったが、事実が事実なだけに、先生は何も言えないようだ。もう寝るなよ、の一言だけ呟いて、授業に戻る。

　そんな先生の様子を見て、俺の気分も少しだけ晴れた――のだが、ふと周りを見ると、クラスメイトの何人かは、俺に批難するような眼差しを向けていた。

　授業が終わるやいなや、そのうちの何人かが俺の机の周りに集まってくる。

「神野、あんたいい加減にしなさいよ！」

　眼鏡におさげという、いつの時代のテンプレだと突っ込みたくなるような見た目の学級員女子が言った。

「あんたのせいで、皆迷惑してんのよっ？」

「そうだぞ瞬！　周りのことも考えろよ！」

　見た目は特に変わったところのない、どこにでもいるようなこの男子生徒は、確か男子学級委員だったか？　『瞬』なんて名前で気安く呼ばれているが、俺はこいつの名前を実はまだ覚えていない。

というか、そもそも俺がちゃんと名前を覚えている生徒は、このクラスにはいない。今は２０１５年の四月二十日で、ついこの間クラス替えがあったばかりだからである。俺の通っている『高校』は、生徒の数が信じられないくらい多いことで有名で、一つの学年にクラスの数は何と二十。しかも、一クラス四十人で構成されている。毎年クラス替えがあるのだが、新しいクラスに知り合いが誰もいないなんてことはザラだ。知り合いが誰もいない事で心が折れたせいでクラスに馴染めず、不登校になってしまった生徒も割といるらしい。

この学校に入って初めてクラス替えを経験した俺も、その『新しいクラスに知り合いが誰もいなかった』生徒の一人だ。幸い心が折れることこそ無かったものの、なんか面倒なので、未だに誰の名前も覚えていない。まぁ、しばらくすれば自然と覚えるだろう。

「おい瞬、聞いているのかっ？」

「ああ悪い。で、なんだっけ？」

　周りに集まってきた人達が誰だったかを思い出すのに苦労していた俺は、さっきまでこいつらが何の話をしていたのか、全く聞いていなかった。そういえば、脇でごちゃごちゃ言っていた気がする。

「あんたねぇ……」

　俺の発言が気に入らなかったのだろう。女子学級委員の友達らしき女子が、声をワナワナと震わせていた。手と指は、今にも俺に掴みかからんとばかりにピクピクと動いている。

「お前が真面目に授業を受けないから、皆が迷惑してるという話をしているんだ！」

　女子の言葉の続きを、男子学級委員が代わりに言う。そう言われると、そういえば、そんな話をしていた気がするが、それでも俺には何の事かさっぱりだ。一体何が『迷惑』なのだろうか？

「お前が先生を挑発するから、テストの難易度が上がっているんだぞ！」

　男子学級委員の友達らしき男子が、鋭い声を上げた。今にも殴りかかってきそうな雰囲気である。

「難易度が上がっている？　そうなのか？」

「そうだよ！」

　女子学級委員が声を張り上げた。どうやら、本当の事らしい。

「お前のせいで、去年の最後の定期テストの、五教科の平均点は三十点を下回ったんだからな！」

「へー」

　全教科満点だったから、平均点とか聞いていなかった俺は、割と自分でも分かるくらいに間抜けな声を出す。知らなかったわ。ただ、言われると少し難しかったような気もする。

　だが……

「まぁ、知ったこっちゃない。精々頑張れ。俺はいつも通り満点取るからさ」

「なっ……瞬、そんな言い方……！」

「うっせーな……点取れないのは、お前らの問題だろう？　自分の勉強不足を棚にあげて、俺を責められても困る」

　そう言い捨てた俺に、彼等はその後も脇でごちゃごちゃ言っていたが、次の授業が始まるチャイムが鳴ると、やがて諦めたように自分の席へと戻っていった。

　学校が終わると、俺はさっさと帰路につく。俺は部活には入っていない。そこら辺には全く興味が無いからな。

　日も落ちかけてきて、空が夕焼けに染まっていた。それを覆い隠すように、いくつものビルや高層住宅が聳えている。都心から少し離れているものの、俺の住んでいるこの街は大自然とは程遠い。それでも、俺は結構この街が気に入っていた。空気は不味いし、学校も大して面白くもないが、それが俺に、堪らないほどの心地よさを与えていた。

　そのため――いや、本当はそれが理由じゃないことなんて分かっている――だろうか。俺はこの街から外に出ようとすると、軽く拒否反応を示してしまう。

「……ん？　なんだ、あれ？」

　帰り道の途中にある、狭い路地の奥で、何かが光ったような気がした俺は、ピタリと足を止めた。どうやら、周りの人は気が付かなかったらしい。急に立ち止まった俺に、すぐ後ろを歩いていた人とかは、迷惑そうな視線を投げつけてきた。

　すいません、といった感じで軽く頭を下げる俺だが、目は路地の奥に釘付けになっていた。

　気になった俺は、普段は決して入らないような場所へと足を踏み入れる。人一人が何とか入れるようなその場所を、ゆっくり、ゆっくりと進んでいく。傍から見れば、随分と怪しい行動だっただろう。

　それでも気にならなかったのは、その光に、何か惹かれる物を感じたからだ。

「……気のせいか？」

　だが、光った辺りはおろか、奥まで来てみても、何も無かった。路地の奥はＴ示路になっていて、左はドラム缶が道をふさいでいる。右も瓦礫が積まれていて、どかさないと通れそうもない。

　仕方がないから引き返そうと思った、その時だ。

「……ん？」

　瓦礫の向こう側で、さっき見た光がもう一度瞬いた気がした。制服が汚れるのも気にせず、俺は導かれるように瓦礫をどかして、光った場所へと向かう。

　瓦礫をどかして進んだ先は、やっぱり行き止まりだった。光も今は無い。目の前のコンクリートに手の平を当ててみたものの、何の変化も見られなかった。何かに期待していた俺は、軽く溜息を吐く。

　だが、その瞬間、

「……えっ？」

　俺の目の前で、道を塞いでいる灰色のコンクリートに、ゴルフボールほどの大きさの黄緑色の光が現れる。光は徐々に大きくなっていき、あっという間にサッカーボール程の大きさにまでなっていた。しかも、まだまだ大きくなっていく。よく見れば、この光はまるで、どこかに通じているかのように、奥行を感じた。すると、何か黒い二つの黒い影が現れる。一つの影はさっきのゴルフボールくらいの大きさで、もう一つの影は針の穴より少し大きい程度。

　一体何だろうかと思った俺は、その光の中を覗き込もうとする。その刹那、

「キャアァァァッ！」

「どいてどいてぇっ！」

　それらの声が男の物なのか、女の物なのかを認識するより早く、俺は仰向けに吹っ飛んでいた。

　息が苦しい。いやそれ以前に、呼吸が出来ない。体が痺れるような感覚。恐らく、みぞおちに何か硬い物がぶつかったのだろう。最早指一本動かすことも出来ず、俺の視界は紅の空を最後に、ブラックアウトしていった。